

「加藤周一文庫」と加藤周一の方法

鷺巣 力

(1) 加藤周一の遺した蔵書・ノート・資料

「書いたものが少しある」

加藤周一は2008年12月5日に亡くなった。その7カ月前に大腸のポリープを除去するために入院した。30年余の長きにわたり加藤を支えつづけたパートナーの矢島翠から、加藤の歿後に伺ったことだが、検査のときに胃がんが発見され、すでに化学療法も放射線療法も外科手術もできなく、手の施しようがないことを医師に告げられたという。それでも加藤は私に「そんなにたちの悪いがんではない」といった。しかし、医者だった加藤は自分の余命がどれほどか、おおよそ見当をつけていたはずである。

それから3カ月ほどたった8月のある日、加藤宅を訪れると「書いたものが少しある」と告げられた。何が、何処にあり、それをどうして欲しいかなど、詳しいことはいっさい何もいわれなかった。ただ「書いたものが少しある」といっただけである。うかつにも、おおかた未発表原稿があるということか、それを刊行してほしいということだろうと推測した。

加藤が亡くなり、お別れの会(2009年2月)などが済んだころに、矢島からある相談を受けた。加藤が遺した著書、それに蔵書や資料類について、矢島はふたつの望みをもっていた。ひとつは、これらの散佚を防ぐために、どこかに一括して受けいれてもらいたいこと。もうひとつは、一

定の条件が課せられるにせよ、これらを市民にも閲覧できるようにしたいこと。このふたつの条件が満たされれば、すべてを無償提供する。然るべき受け入れ先を探してほしいという相談だった。

加藤は生粋のアカデミーの人ではない。アカデミーとジャーナリズムのはざままで自らの仕事を営んできた。しかも、日本の大学で教鞭を執ることが少なかった。したがって、いわゆる「教え子」とか「弟子」といわれる人たちが、とりわけ日本にはいなかった。アカデミーの人ならば、学統に連なる人たちが責任をもって、遺された蔵書や資料やノート類を処理するだろう。だが、加藤にはそういう人がいなかった。加藤との公私にわたる付き合いが40年に及び、たまたま晩年近くに『加藤周一自選集』（全10巻、岩波書店、2009～2010）の編集を加藤とともにしていた関係で、矢鳥も私に依頼しやすかったのだろう。もろもろの条件を考えあわせると、引き受けないわけにはいかなかった。

ともかくにも現物を見ないことには何も始まらない。こうして初めて加藤の書庫に入った。矢鳥を除いてはほとんど家族も入ったことがないという書庫は、母屋のなかにある20畳ほどの書庫と、別棟になっている10畳ほどの書庫とのふたつがあった。蔵書数はおよそ2万冊に達するかと思われた。蔵書の分野は、加藤の関心領域を示していて、ほぼありとあらゆる領域に広がっていた。この時点ではのちに述べる「手稿ノート」は確認できなかった。

2万冊に上の蔵書や資料類を一括寄贈するとなれば、受け入れてくれる可能性のあるところは多くない。加藤が図書館長を務めたことがある東京都立中央図書館、あるいは長く住んだ世田谷区が運営する世田谷文学館、あるいは加藤が関係した大学の図書館などを候補として考えた。東京都立中央図書館については、当時の都知事は石原慎太郎であり、とうてい受け入れるはずはないと判断した。世田谷文学館長はフランス文学の菅野昭正氏が務めておられ期待も抱いたが、規模の問題からして無理

だろうと断念した。残る候補は大学図書館しかなかった。しかしこの大学も財政事情が厳しい。しかも、2万冊の蔵書が一時に増えるわけで、収納スペースの問題からしても、おいそれと受け入れられないことは容易に理解できた。

そういうなかで、立命館大学を第一候補として考えた。その理由は、第一に、加藤は、立命館大学国際関係学部で、1988年から2000年にかけて足掛け13年間、客員教授を務めていたこと、国際平和ミュージアムが設立され、1992年から1995年までの3年間、その初代館長に就いていたこと、そのふたつのことを考慮したのである。

もうひとつ、立命館大学のある京都といえば、加藤周一『続羊の歌』を読まれた方は御存知だろうが、「京都の庭」という一章があり、そこには加藤の京都の文化に対する思いが述べられ、京都に対して特別な愛着を抱いていたことが記される。こうしたことを考えあわせると、立命館大学以上に相応しい場所があるとは思われなかった。

加藤の蔵書、資料などを立命館大学に寄贈する交渉を控えて、どのような考え、どのようなイメージをもつか、私なりにまとめておく必要を痛感した。そのとき参考にしたいと考えたのが、東京女子大学「丸山眞男文庫」であった。そして「丸山眞男文庫」に当初から関与されていた松沢弘陽先生に御相談申し上げた。松沢先生は、もろもろの注意点を話され、『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』の創刊号から第5号まですべての号をくださり、これを参考にするようにいわれた。以降、加藤周一文庫を考えるとときには、たえず「丸山眞男文庫」を参考にさせていただき、それは今日にまで及んでいる。

吉田図書館長との面談

2010年6月、矢島の意向を受けて、吉田美喜夫立命館大学図書館長(当時)に相談するために私は京都に赴いた。面談に同席したのは、武山

精志図書館次長（当時）であった。吉田館長とも武山次長とも、それ以前に一面識さえなかった。にもかかわらず、おふたりは快くお会いしてくださり、真摯に話を聞いてくださった。吉田館長も武山次長も、加藤周一に対する評価が高く、加藤の遺した蔵書、資料、手稿ノートが立命館大学に収められれば、それは大学にとって大きな財産になるという認識を示された。

吉田館長からは7点にわたる質問を受けたが、その質問は受け入れる場合を想定しながら、具体的に起こりうる問題点に関する質問であった。質疑応答や意見交換を終えて、吉田館長はいわれた。「結論は図書館だけでは出せません。常任理事会に諮り、大学としての結論を出すので、少し待つてほしい」。要するに、受け入れる提案を常任理事会に諮るということである。そのような前向きの御返事をいただいて、私は東京に戻り、矢島に報告した。

結論が出るのは年末になるかもしれないという見通しも吉田館長は述べられたが、朗報は思いがけなく同年9月に届いた。立命館大学は、何らの付帯条件を付けることなく、矢島の意向を尊重し、寄贈を受け入れてくれたのである。立命館大学の英断がなければ、「加藤周一文庫」ははたして存在し得ていただろうか、という思いは今日でも私のなかにある。

同年12月に吉田館長と武山次長が東京・上野毛の加藤宅に来られ、現物を確認された。そして、同月13日付けで、加藤の著作権継承者としての矢島翠と、立命館大学図書館長の吉田美喜夫氏と、矢島の代理人としての鷺巣力の三者のあいだで、「故加藤周一氏の蔵書寄贈に係る覚書」を締結した。その覚書には、第一に「故加藤周一の蔵書、資料、ノート、書簡類を無償で一括立命館大学に寄贈する」こと。第二に、立命館大学に寄贈された資料、ノート、書簡類の「著作権は著作権継承者に帰属する」こと。第三に、「公開資料は、立命館学園構成員・関係者および一般市民の利用に供する」ことなどが謳われた。覚書の調印者として鷺巣が加わっ

たのも、鷺巣が「代理人になっておく必要がある」という松沢先生の御意見を参考にしたからであり、かつ矢鳥も松沢先生のお考えに賛成したからである。

搬出作業と「手稿ノート」の発見

搬出作業は2011年2月に丸2日かけて行なわれた。搬出作業には、立命館大学から武山次長が、加藤側からは矢鳥と鷺巣とが立ち会った。当時の矢鳥は体調があまり優れずに、搬出作業を見守ることは出来ず、すぐに寝室に戻られた。ふたつの書庫、書斎、食堂、玄関先などから次々に蔵書類が運び出された。

ところが、2日目になっても加藤から「書いたものが少しある」といわれた、その「書いたもの」が見つからなかった。書庫、書斎、書棚からはあらかじめ蔵書や資料類が運び出され、がらんとしてきた。

まだ手つかずの部屋としては納戸として使っていた小さな部屋が玄関わきにあったが、そこには生活用品などがうず高く積まれていた。まったくの私的空間であり、その部屋に入ることは躊躇われた。しかし、この部屋がどうしても気になって、体調を崩して休んでいた矢鳥の許可を取って入ることとした。うず高く積まれた生活用品を取り除いても、蔵書や資料類やノートは見つからなかった。

ところが、生活用品を取り除くとこの小さな部屋には作りつけの棚がいくつもあることが分かった。床から天井裏まで、かなりの戸棚があったのである。ひとつの棚の扉を開けると、なかからは封筒に入った書類やファイルされたままの資料と思しきものがびっしりと積み上げられているのが見つかった。その中身を確認して驚いた。それは加藤が遺した「手稿ノート」だったのである。これぞまさしく「書いたものがある」といった、そのものであることに疑いはなかった。しかし、その存在は矢鳥さえ知らなかった。

武山次長と私は驚き仰天し、今度は各部屋のありとあらゆる棚を片端から開け始めた。天井裏さえも確認した。こうして発見された「手稿ノート」はおびただしい数に上った。

「手稿ノート」の中身にどんなものがあるかを確認する時間的余裕はなかった。探し出された封筒やファイルを、とにもかくにも荷造りして送りだすのが精いっぱいであった。

搬出にあたっては、蔵書や「手稿ノート」だけではなく、加藤が使っていた机や椅子、そして小さな書棚なども搬出することを考えた。これらは今日、立命館大学図書館内の加藤周一文庫に展示されている。加藤が長年使っていた机や椅子はそれほど立派なものではなかった。机の立派さと仕事の立派さは正比例するわけではないことを、学生や市民にも知ってもらいたかったからである。

2011年2月にあらかたの蔵書や資料類、そして「手稿ノート」を搬出し、立命館大学に送った。しかし、その時点ですべての搬出作業が終わったわけではなかった。多少が残されたままになっていた。ところが、その後、矢島の体調がますます芳しくなくなり、家探しをするために自宅内に入ることができなくなった。

それから半年後の2011年8月末に矢島は亡くなられた。加藤の著作権は加藤の甥の本村雄一郎氏に引き継がれた。著作権所有者が矢島から本村雄一郎氏に変更になったことを受け、2010年に締結した「故加藤周一氏の蔵書寄贈に係る覚書」を締結しなおした。新しい覚書は、著作権所有者の本村雄一郎氏、図書館長和田晴吾氏、本村氏の代理人としての鷲巢力の三者のあいだで、2011年12月20日付けをもって締結された。覚書の内容は1年前のものと変わらないものだった。

矢島が亡くなり、ほどなくして加藤一家と加藤の実妹本村久子氏御一家が長年住みつづけた二世帯住宅が取り壊されることとなった。取り壊される前にもう一度伺って、最後の搬出を行なった。

そのときにフランス政府やイタリア政府から授与された勲章などが戸棚の奥に文字通り「放り込んで」あり、ほこりにまみれているのを見つけた。実妹本村久子氏に「この勲章、どうされますか」と尋ねると「私がもらったわけではないし、どうぞもっていらしてください」という御返事だった。有りがたく頂戴し、これも現在立命館大学図書館の貴重書庫に収められている。

フランス留学中に知りあい、のちに加藤と結婚したヒルダ・シュタインメッツに宛てた加藤のおびただしい数の書簡を発見したのもこのときである。

(2) 立命館大学図書館が受けいれた蔵書・資料・手稿ノート

整理作業の開始

あらかたの搬入が終わった2011年2月の段階で、立命館大学図書館と加藤の御遺族とのあいだの橋渡し役を務めた私の任務は終わった、と考えていた。ところが、同年3月に図書館武山次長から連絡を受けた。「蔵書については、図書館スタッフで整理作業を進められるが、「手稿ノート」については図書館スタッフでは整理作業を進めることが困難であり、お手伝いいただけませんか」という依頼であった。

「手稿ノート」の発見のときから、この「手稿ノート」の整理作業は時間と費用のかかる作業になるだろう。しかも、加藤の著作について親しんでいないと、とうていできる作業ではない。「手稿ノート」に書かれる内容について理解できなければ、よくすることができない作業だと判断していた。もちろん、私とてよくできる作業だとは思わなかったが、さりとてほかにできる人のあてがあるわけではなかった。蔵書、資料、「手稿ノート」の受けいれを要請しておきながら、整理作業の「お手伝い」はできませんとはいえなかった。

立命館大学図書館は、何をどれほど受け入れたのか。この時点ではまだ十分に明らかではなかったが、のちのデータで確認すると、以下のとおりである。

蔵書（図書） 17,048 冊
蔵書（雑誌） 2,036 冊（506 タイトル）
冊子型ノート・手帳 88 冊
ファイル 約 1,000 ファイル（主として「手稿ノート」のファイルである）
写真 約 2,000 枚（個人写真から資料用写真まで）
書簡 約 1,000 通
立体物 55 点（賞杯など）
その他（地図・パンフレット） 約 1,800 点

整理作業は 2011 年 4 月から始まった。整理作業はふたつのグループによって行なわれ、蔵書類の整理作業は図書館スタッフによって進められ、「手稿ノート」のデータベース作成作業は鷺巣と臨時雇いの中野陽子氏が進めた。

蔵書の特徴

蔵書のありようは、その持ち主の関心領域を示すだけではなく、当人の研究方法をも示すものだろう。加藤の蔵書のありようにはいくつかの特徴があった。

第一に、集められている蔵書の領域は、日本文学史関係や日本美術史関係はいうまでもなく、フランス文学、フランス思想、日本思想史、日本仏教史、神学論や宇宙論、映画論や演劇論、そして日本経済史関係、中国経済など、ほぼありとあらゆる領域に拡がっていることであった。

ことに日本仏教史関係の蔵書と経済関係の蔵書、資料類が思いのほか

多かった。仏教史関係では、明治大正時代に刊行された『弘法大師全集』や『慈眼大師全集』や『法然上人全集』、あるいは一休宗純関連の江戸時代刊行の古書籍、戦前および戦後に刊行された『五山文学全集』『新五山文学全集』など、多くの仏教史関係の書籍を所有していた。

また加藤はしばしば国際問題を論じたが、そういう場合には、まず経済的背景を押さえることを常とする。『日本文学史序説』（筑摩書房、上巻1975、下巻1980）の各章の冒頭は、必ずその時代の社会的経済的背景について述べる。

1968年のソ連軍による「プラハ侵攻」が起きたとき、加藤の代表作のひとつである「言葉と戦車」（『世界』1968年11月号、『加藤周一自選集4』所収）が著わされたが、執筆のためのノート「1968 1969」（デジタルアーカイブで公開済み）にも、当時のチェコスロヴァキアの経済状況を記している。

マルクス・エンゲルスの著作も、加藤には珍しく書き込みをしながら、独語版で読んでいた。加藤がマルクス・エンゲルスの著作を読んでいることを確認したとき、丸山眞男が「加藤君は、マルクス主義をくぐり抜けている」といったことを思い出した。

第二に、ほぼ森羅万象にわたるほどの広い領域に関心を示しながら、蔵書数はおよそ2万冊であり、学者としてはそれほど多い蔵書数とはいえない。それにはいくつかの理由があるだろう。

まず加藤は日本の大学に正教員として籍を置いたことがほとんどない。したがって、大学内に研究室を与えられ、そこに蔵書を置くことはできなかった。基本的には自宅の書庫に収めるしかない。いきおい蔵書数は制限せざるを得ない。実際、加藤は「総量規制」している、といていた。終わった仕事の文献は、廃棄し、売却もしていた。

15を数える海外の大学で教鞭を執ったが、長期にわたって籍を置いたのはカナダのブリティッシュ・コロンビア大学（UBC、1960-1969）だけで

ある。あとはベルリン自由大学（1969-1973）にしても、イエール大学（1974-1976）にしても、長期にわたって籍を置いたわけではない。しかも、海外の大学に赴任するたびに、蔵書をもち歩くことは出来ない。その大学の図書館がもつ蔵書を利用することになる。

ブリティッシュ・コロンビア大学でも、イエール大学でも、加藤は「文献には不自由しなかった」といっていた。それは文献が豊富に用意されていたことを意味するだろうが、思うように購入できたことも意味していたに違いない。

3つ目の理由は加藤の方法と深く関係するが、ことに加藤の日本文学史研究や日本美術史研究は、他の研究者の研究書に言及することが多くはない。あくまでも加藤が「原典」や「原作品」をいかに読んだかが中心に論じられる。したがって、他の研究者の研究書をそれほど多く所有していなかったことである。

ファイリングされた手稿ノート

「手稿ノート」については、冊子型ノートが40冊ほど、残りはルーズリーフ型ノートである。その大半は加藤によってファイリングされ、それぞれに名称がつけられている。たとえば「〔日本文学史（古代）〕」とか「〔日本文学史（中世）〕」とか。ひとつのファイルには、数頁から数十頁が収められている。

ファイル数は600を超える。さらに未整理のままに遺されたルーズリーフがあり、これは加藤周一文庫スタッフの手で仮の名称をつけてファイリングし（亀甲パーレンをつけて区別した）、その数は400に及ぶ。

何故加藤はルーズリーフ型ノートを採用したのだろうか。おそらく冊子型ノートだと後日に追加しにくい、ルーズリーフ型ノートだと、あとからの加減が容易である。差し替えや追加が自由にできるのがルーズリーフ型ノートの利点だろう。しかし、何時書いたかが確定できないと

いう欠点も生じる。実際、同じファイルに収められる手稿ノートでも、書かれた時代が異なるものが混在している。これら一枚一枚を書いた時期を特定することはきわめて困難である。

もうひとつの問題は用紙にある。上質紙を使っていればともかくも、1960年代にはいわゆる「わら半紙」が普通のことであった。しかも、加藤が書く文字は小さく、そのインク文字は経年変化で滲んでいる。解読するのさえ難しい場合もある。

さらに年次手帳が40冊以上あり、1950年代のものが数冊、1967年から2008年までは1年も欠けることなく完全に揃っている。これらを繰れば、この間に加藤がとった行動のあらかたは判明する。

来信類

来信類の整理は2021年から始めたが、その数がどれほどかはまだ正確にはつかめていない。なかには加藤が認めた書簡があり、本村雄一郎氏はじめ加藤の家族や知人たちから御寄贈いただいた書簡もある。

書簡の大半は外国人からの来信であり、それらはタイプの場合ならともかくも、直筆の場合は解読することさえむづかしい。そもそもサインが読めない。したがって、誰からの書簡かさえも確定できない。われわれは「サイン帳」をつくり、このサインは誰々だろうと、サイン帳を見ながら差出人を確定する作業を続けている。

個人写真と資料写真

写真には個人写真と資料写真とがある。個人写真では、生後100日のときの写真から晩年にいたるまでの写真がかなりの数に上る。加藤は東京帝国大学の医学部内科教室を1943年9月に繰り上げ卒業しているが、その直前に撮影したと思われる記念写真も遺っている。内科教室の写真は、加藤以外のすべての学生が角帽をかぶっているが、ひとり加藤だけ

が無帽で、いちばん後ろで不貞腐れた表情をしている。加藤は孤独を生きた人だが、その写真は加藤の学科内での位置を象徴しているように思える。

それに輪をかけているのが中学校の卒業写真集である。卒業写真集を加藤は遺していないが、国会図書館で確認すると、東京府立第一中学校、今の東京都立日比谷高校の卒業写真集のどこをみても加藤は写っていない。集合写真で撮影時にいなかった人の顔は丸窓で脇に載せることが多い。だが、それさえもない。おそらく卒業写真集に自分の顔が載ることさえ拒んだのではなかろうか。

それだけではない。一中には『学友会雑誌』という校内誌があり、これには丸山眞男も、隅谷三喜男も、水田洋も文章を寄せている。ところが、加藤の文章は一度も載っていない。

校内雑誌にも寄稿しない。卒業写真の撮影も拒む。いかに中学校のときに孤独と疎外を味わっていたかがうかがい知れる。加藤はその後『羊の歌』で、中学時代を「空白五年」と表現した。

地図と年表

資料類のなかで特徴的なことは、地図帳が200を超えて所蔵されていることである。外国の都市を訪れると、そこで地図を購入する習慣があったのだろう。初めて訪れた都市ならば、誰しも地図を必要とする。ところがパリの都市図さえいくつも所蔵していた。1951年から55年までの3年余り、パリに留学していた加藤は、地図を見なくても市内を移動できるほどに知っていたに違いない。にもかかわらず、パリの地図帳をいくつも所蔵している。それは何故だろうか。おそらく移動するために購入したのではない。第一に、地図帳は都市を全体的に把握する手段だった。そして過去に購入した地図帳と新たに購入した地図帳によって「変化と持続」を確認していたのだろう。ここにも、対象を全体的に把握す

る方法が貫かれ、たえず「変化と持続」を確認する方法が採られている。

地図は市販されているものを購入するか、旅行社や航空会社からもらったもので、自分ではつくってはいない。ところが自らつくったものに「年表」がある。加藤の「手稿ノート」のなかには、手書きによる年表がたくさん含まれる。

なぜ「年表」を自らつくったのか。これもまた時代を概観し、俯瞰する方法に基づくと思われる。誰と誰とが同時代人であり、どういう時代を生きていたかなどは、もちろん年表を繰ればわかることであるが、自らつくれば、自分の考え方に基づいた年表が一目瞭然になって目の前に現われる。その意味では「年表」も「地図」と同じく、加藤の方法とつながっているものである。しかも時間と空間とを意識していたこともうかがえる。

(3) 「加藤周一文庫」の方針

蔵書の3グループ

蔵書、資料、「手稿ノート」の整理作業を始めたとき、整理作業をどのように進めるかについての指針は示されていなかった。そこで図書館の最高責任者であった渡辺公三副総長(当時)に相談に行った。渡辺副総長は理解が早く、かつ結論と実行には慎重であったが、「活きた文庫」をつくろう、という点で意見が一致した。「これまで多くの大学の個人文庫は、保存されるだけのことが多く、必ずしも活用されていない。活用される文庫をつくらなければ、大学に文庫を置く意味が少ない」といわれた。「活用される文庫」とするには、資料がそろっていて、使い勝手が良い条件を整えることが必要であるといわれた。渡辺副総長のこの方針は、「加藤周一文庫」の基本方針のひとつとなった。

矢島の希望であった「一括保存」と、「市民にも公開」することも念頭

に置いた。ところが、図書館の蔵書の「保存と公開」とはほぼ二律背反の作業である。「保存」に力点を置けば「公開」は制限を設けざるを得ない。「公開」を重視すれば「保存」には多少目をつぶらないとならない。「保存と公開」をどのように折り合いをつけるかという、どこの図書館も悩む問題に直面したのである。

加藤の蔵書、資料、「手稿ノート」の受け入れを打診していたとき、これは僥倖としかいいようがないことなのだが、立命館大学では新しい図書館建設計画が進んでいた。かくして新図書館のなかに「白川静文庫」と「加藤周一文庫」とを一室に設けるという構想が組みこまれた。いわば白川と加藤の〈ルームシェアリング〉である。

学生・教員・職員など立命館大学関係者だけではなく、広く市民にも直接加藤が遺した蔵書などに触れられる機会をつくる方法も考えた。こうして蔵書の大半を開架式書架に配架し（約1万2000冊）、その一部については貸出しも行なうようにしたのである。

すべての蔵書を開架式に配架することはむづかしい。東京女子大学の「丸山眞男文庫」の例を参考にしながら、①加藤の書きこみが一行でもあり、付箋などがひとつでもついているものは、開架式には配架しない。②古い、あるいは貴重な文献で、損傷したり紛失したりしたら二度と入手が困難な蔵書も開架式には配架しない。③著者による献辞が書かれた寄贈本は開架式には配架しない。しかし、この三原則を実行すると、重要な蔵書ほど開架式には配架されない結果となる。致し方ないとはいえ、内心紐促たるものがないわけではなかった。

以上の原則のもとに蔵書を分類していった。そして蔵書類を3種に区別し、分けて配架した。その第一は、加藤の著作である。その第二は、加藤について書かれた書籍雑誌である。そして第三には、加藤が所蔵した文献である。

第一の加藤の著作は、加藤が必ずしも自著作の保存に積極的だったわ

けではないこともあり、欠けているものが少なくない。それはとりわけ初期の著作、ことに戦時中から敗戦直後に書かれた雑誌や同人誌に書かれた著作がない。これらも集める必要があると判断した。所蔵される著作は利用者の便宜を考慮して発表年代順に配架することとした。

第二の加藤論に関しては、加藤は他人が自分の仕事について何をいったかについて、それほどの関心がなかった。したがって、加藤論も意識的に集められた痕跡は見えない。しかし、加藤研究という観点からすれば、加藤に対する論評が集められていることは不可欠であろう。これも発表年代順に配架することとした。

第三の参考文献については、これを増やしたり、減らしたりすることは出来ない。原則にのっとり、ある文献は開架式に、ある文献は閉架式に配架する。参考文献に関しては十進分類法によって整理し、配架した。

『校友会雑誌』と『しらゆふ』

加藤が所蔵していなかった自著作が収載される雑誌や同人誌があり、これらも収集してきた。たとえば第一高等学校時代の『校友会雑誌』もそのひとつである。同誌には「正月」（1938年2月、『加藤周一自選集1』所収）、「従兄弟たち」（1938年6月、単行本未収録）、「秋の人々」（1938年11月、単行本未収録）を寄稿しているが、これらの雑誌も加藤周一文庫に収められた。

また「昭和十五年会」という東京帝国大学医学部の学生たちが編集したと思われる同人誌があり、その名を『しらゆふ』（漢字表記すると白木綿）という。加藤はこの『しらゆふ』に「倦怠について」（1940年、創刊号）、「嘗て一冊の『金槐集』餘白に」（1941年、第2号）、「頌」（1942年、第3号）、そして戦後に「会員近況だより」（1958年、復刊2号）を寄せている。この『しらゆふ』は矢野昌邦氏作成の「著作年譜」（『加藤周一自選集10』）にも掲載されていない。これらの号もすでに購入し、加藤周一文庫に収めら

れている。

なかでも「嘗て一冊の「金槐集」餘白に」は注目に値する。加藤は戦時下から敗戦直後までに少なくとも3回にわたって『金槐集』について原稿を残した。1回は「青春ノート」（デジタルアーカイブで公開済み）であり、1回は『しらゆふ』（1941年）であり、1回は『世代』（1947年1月号、『一九四六 文学的考察』所収）である。

戦時下の加藤は少数者として孤独のなかを生きていた。そのとき自らを支えるひとつの方法は、詩歌を読むことであった。当時、加藤が好んで読んだのは『建礼門院右京大夫集』、定家『拾遺愚草』、そして実朝『金槐集』である。いずれも時代から疎外され、孤独を生きていた詩人たちの作品である。彼らに対する共感があり、とりわけ実朝に対する共感があったからこそ、3回も『金槐集』について著わしたに違いない。その意味では、加藤の青春を象徴するものといえるだろう。

「手稿ノート」のデジタルアーカイブ化

加藤周一文庫は、蔵書と並んで大量の「手稿ノート」を所蔵する。総頁にして1万頁を超える。これをどのように「公開」するか。もちろん現物は、保存上の理由によって、公開することはできない。

そこで参考にしたのが丸山眞明文庫の「草稿類デジタルアーカイブ」であった。「手稿ノート」のすべてをデジタルアーカイブ化することは困難にせよ、加藤周一研究にとって、重要と思われる「手稿ノート」をデジタルアーカイブ化することを考えた。これはもちろん、渡辺副総長にも進言し、武山図書館次長にも提案した。かくして「手稿ノート」のデジタルアーカイブ化作業が始まった。

2016年4月に新しい図書館「平井嘉一郎記念図書館」が開館し、それと合わせて「加藤周一文庫」が創設されたが、そのときに何らかのデジタルアーカイブを公開することを図書館から求められた。

そこで選んだのが「手稿ノート」のなかで、独立性が高い8冊の「青春ノート」と名づけたノート類であった。これは1937年から1942年にかけて、すなわち18歳から22歳にかけて書きつづけられた冊子型ノートである。順不同に、小説、詩歌、日記、評論などが綴られている。

この8冊のノートを繰っていくと、加藤の関心が創作から評論へと移っていくことも分かる。時代は戦争色が次第に濃くなるときに、加藤がいかに反応していたかも読みとれば、当時の加藤がどのような読書生活を送っていたかを知ることができる。最初にデジタルアーカイブ化するにふさわしいノート類と判断した。なお、この8冊は『加藤周一 青春ノート』として2019年に人文書院から刊行された。

デジタルアーカイブの将来を見越せば、資料のデジタルアーカイブ化は今後とも拡大し、たんに映像でも読むことができるという条件だけでは不十分になる日が早晚来るであろう。そのためには「手稿ノート」を「キーワード」「頻出キーワード」で検索できるようにシステム構築する必要があるだろうと判断した。この作業は時間と資金が多分に必要であるが、次代のデジタルアーカイブの標準を念頭に置いて、作業を進めてきた。

この頃に加藤文庫作業チームは当初から大きく変わってきて、当初からのメンバーだった中野陽子や富山仁貴（関西学院大学、近代日本史専攻）は、それぞれ個人的な理由によって作業チームから離れた。あらたに猪原透（近代日本史専攻）、西澤忠志（音楽批評論専攻）、そして半田侑子（フランス文学、加藤周一論専攻）によって担われていた。のちに福井優（戦後日本思想史専攻）、落合優翼（日本近現代史専攻）、狩野晃一（日本近現代史専攻）、蛭子良風（フランス哲学専攻）も加わるが、彼らの献身的な作業があったからこそ、デジタルアーカイブ化作業を進めることができたことは確実である。

「手稿ノート」のデジタルアーカイブの公開は2016年以降、毎年6～7

冊ずつ公開しており、2023年3月現在、43冊に達している。今後も順次、デジタル化が完了したところから公開する予定である。

なお、加藤周一文庫が作成する「手稿ノート」のデジタルアーカイブは下記のURLでTRC-ADEAC「立命館大学図書館／加藤周一文庫デジタルアーカイブ」にアクセスし、閲覧することができる。

<https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/top/>

文庫活動と研究活動

「手稿ノート」の整理作業は、図書館内で「手稿ノート」を中心に整理作業を進めていた。しかも立命館大学の正規の教員は誰も関与していなかった。そのうえ作業は相当の長期間に及ぶことは明らかだった。

にもかかわらず、加藤周一文庫がいかなる作業をしているか、学内にさえ知られず、しかも研究とは無関係に作業が進んでいた。そのことに、私は危機感を覚えた。このままでは学内世論は加藤文庫の作業に否定的になる。そこで渡辺副総長にふたたび面談を求めた。加藤文庫の作業の現状と、将来の問題点、そして大学である以上、加藤周一文庫を基盤として加藤周一研究を進めるべきだと訴えた。2013年7月のことであった。

それから半年余りが経って、2013年10月末に渡辺副総長とふたたび面談し、今後の加藤周一文庫について、意見交換を行なった。渡辺副総長は、研究会を組織することを提案し、研究会メンバー候補を数名挙げられた。同時に、科研費を申請することを求められた。学内の締め切りはすでに過ぎていているが、何とか押し込めるから、数日以内に科研費申請書を作成することという要求であった。

私は面食らった。科研費申請などこれまで一度たりともしたことがない。何をどのように書くのか、書類作成にあたっての勘所はどこなのか、など実際的なことがまったく分からない。しかし、図書館の整理作業と加藤周一文庫を基盤にした研究とは「クルマの両輪であり、どちらが欠

けても成り立たない」という主張をしたのは私であり、無理は承知の上で引き受けざるを得ないと判断した。それから私は他の作業は脇に置き、数日で科研費基盤研究 (C) の書類作成を完成させたが、幸いにも 2014 年 4 月に科研費基盤研究 (C) が採択された。加藤周一文庫の整理作業の一部は、科研費からも出金が可能になった。

一方、渡辺副総長は立命館大学衣笠総合研究機構のなかに「加藤周一現代思想研究センター」を設立することを提案してくださった。こうして 2015 年 4 月には、「加藤周一現代思想研究センター」が設立される運びとなった。

これによって、文庫整理作業と文庫を基盤とした研究活動とが、両立する形になり、その後はこの形を基本にして進むことになる。

2016 年にふたたび申請した科研費基盤研究 (B) (2017 年度から 2019 年度) さらに 2019 年に申請した科研費基盤研究 (B) (2020 年度から 2022 年度) も幸いに採択された。

どこの大学でも同じ状況にあるのだろうが、研究資金や活動資金を外部から調達することが求められる。

著作権所有者の本村雄一郎氏は毎年発生する加藤の著作にかかわる印税について、その 2 分の 1 を「九条の会」に、その 2 分の 1 を「加藤周一文庫」に寄贈されている。総額は 1,000 万円に達するが、それは貴重な資金源となっている。しかし、それだけでは足りない。さらに今後は広く市民からの「寄付金制度」なども構築することを考えて、2022 年度には「クラウドファンディング」を募集し、300 万円を超える御芳志を市民からいただいている。

同じような境遇にあるいくつかの大学の個人文庫の提携が不可欠の作業であると考え。そういう観点からいえば、2017 年に東京女子大学の丸山眞男記念比較思想研究センターと立命館大学の加藤周一現代思想研究センターとのあいだで、研究にかかわる提携の協定が結ばれたことは、今

後の展開を考えるうえで重要な布石となるだろう。また東京大学東アジア藝文書院（EAA）とも提携関係が始まったが、これをさらに継続発展することも大事な問題となる。

（わしずつとむ 加藤周一現代思想研究センター顧問）